知的挑戦の回復

荒牧富美江

テレビ放送二〇周年を迎えて、現在NHKと視聴契約をしている世帯は約二四〇〇万（白黒一〇五〇万、カラー一三六〇万）、四五年度の国勢調査の世帯数を基準にすると八五・五％の普及率になるという。ラジオとあわせると、電波メディアは日本全国ほとんどの家庭に普及したといえよう。ことし八月一五日に発表された、「日本人とその社会」という副題をもつ、四七年度の「国民生活白書」によれば、ラジオ、テレビ以外の情報源として、新聞は各家庭に毎日一・二五部ずつ配達され、書籍は一年間に三・二冊、雑誌は一四・三冊買われている。そして人々はそれらのマス・メディアに、毎日四時間二〇分接し、テレビを三時間一〇分視聴するという数字があげられている。昭和三五年から昭和四五年までの一〇年間で情報供給量は三・二倍にふえたことになり、高度成長時代といわれたこの時代のGNPの実績の伸び率が二・八倍であることを考えると、過去においては予想もできなかった膨大な量の情報を人々は受けとっていることになる。人々は情報量がふえたことによって学習意欲をたかめ、マス・メディアは大量の知識を平等に配分することによって知識を普遍化させるのに役だったといえる。しかも技術はいよいよ発展をつづけ、新しいマス・メディアの開発に挑んでいる。ファクシミリ通信や、家庭にいながら買物などができる閉回路テレビや、将来二〇チャンネル以上にもなるという有線テレビなど、既に実用の段階に入ったものもあり、情報のチャンネルは飛躍的に数を増そうとしている。しかし、情報を受ける側の時間と能力には限度があり、その消化率は、昭和三五年の二五・八％から、昭和四〇年には一七・一％、昭和四五年には一一・八％と次第に下がっているという。「白書」では情報洪水におぼれる危険性を「情報の情報が必要になろう」といっているが、このようなマスコミの急テンポな発達によっておこる情報公害ともいうべき現象が、すでに社会や大衆の性格そのものにマイナスの影響を与えつつあることを見過ごすことができなくなっているのである。

飯坂良明氏は「現代社会をみる眼」のなかで、現代社会におけるマス・メディアの社会的作用の重要なものとして、社会的地位（ステータス）を与える作用と、社会的規律を強制する作用、社会的麻酔剤のような役割を果たす麻酔作用の三つをあげていられる。

メディアからの大量の情報は一方的に絶えず送られ、受け手側からのフィード・バックのチャンスはほとんどないため、常に受け身である大衆はそうした情報の洪水に批判力を失ない同調力を発達させていく。一種の洗脳である。マスコミにとりあげられ、繰返し反復された事項は、次第に社会的に正しいこと、重要なこととしての地位を獲得するようになる。マスコミの寵児となった人物は、えらい人、重要な人として社会的にランクされ、社会的に正しいこと、重要なこととマスコミによって承認されたことは、社会的規範として強制力をもつようになり、もしそれからはずれるようなことがあると、正しくないと指弾され、矯正されようとする。

マスコミによって社会的地位を獲得した人物は、連日マス・メディアに登場して受け手に接することによって受け手の親しい人になってしまう。受け手はマス・メディアの世界にひきこまれて、身近な家族や友人に対してもつ親近感をこの人に対して感じるようになる。場合によっては、家族や友人に対するより一層深い親近感を持つようにさえなる。ブラウン管の中の世界、虚構の世界と現実の世界の間の垣根の存在があやしくなってしまうのである。このことは、テレビの人気番組に寄せられる投書をみれば推測できる。それは知能の問題ではなく、心理の問題であり、マス・メディアのもつ心理的な魔力によるものである。しかしマス・メディアは、所詮は一方通行である。どんなに強い親近感をもっても、テレビとの間に〝対話〟はおこり得ない。テレビ的人間が孤独感を免れない根本が実はここにある。

一方、マスコミが反復とりあげることによって、受け手が社会的政治的問題に対して、たとえ表面的にもせよ関心をもつようになることは、マスコミの作用のプラス的な側面といえるが、その反面、マス・メディアによって茶の間に移された現実にかかわりあうことによって、実際に行動に参加したような錯覚に陥ってしまう危険性もないとはいえない。飯坂氏のいわれるマスコミの麻酔作用である。

マスコミは大量の情報を送ることによって、社会の窓をひらく役割を果たすはずであったのに、一方では、〝自分にはかかわりのないこと〟ということばがあらわす大衆的無関心を助長させ、一方では人間の尊厳を忘れさせるようなプライバシーの侵害問題にまで一役買うような面のあることを忘れてはならない。

これらの、マスコミの逆機能というような面は、単にマスコミ発達途上の一時期の現象で、いずれは克服される一面にすぎないというのだろうか。もしそうだとしても、マスコミのこのような非人間的マイナス面が、若い世代、人間形成期にある世代に影響を与えつつあるとしたら、次の時代にどのような結果を招来することになるだろうか。「白書」では、テレビに対する態度は若年層ほど批判的で視聴時間も短くなっているといっているのだが。

去る昭和四五年に本学のマスコミ・ゼミナールが、「子どもとマス・コミニュケーション」の問題をとりあげ、とくに映像メディアの、小学生に与える影響を調査したことがあった。マンガが大流行した時期で、対象は三つの小学校の三年生から六年生まで四一七名であった。その研究報告（文芸論叢第7集掲載）から、「読書」に与える映像メディアの影響をみてみよう。設問の「本」は種類を問

わずマンガ以外の本と規定した。その結果「本を読むのはきらい」と答えた子どもは予想外に少なく、全体の六％（マンガ二％）「好きでもきらいでもない」とあわせると二八％（マンガ二二％）であった。しかし一日の生活のなかで「本・新聞・雑誌」を読む時間は「一五分」から「三〇分」がピークで、子どもにとって読書は必ずしも重い比重をもってはいなかった。その原因を探るために、数は少ないが、「本をよむのがきらい」と答えた子どもたちがあげた「きらいな理由」を分析して次のようにいっている。

彼らは文字を文章として読み、それを自分の頭の中でイマジネーションに還元して意味を理解するという行為になれていないことが推測される。「字ばかりでごちゃごちゃしているから」といっているのは、彼らが視覚的なものによるイメージの定着に馴れすぎていることを象徴的に表わしているといえよう。その他の理由をみても、イマジネーションを展開させ続ける辛抱強い意志を必要とする読書を、「めんどうだ」「あきてしまう」と遠ざけ、音と映像をもつテレビの安易さ、強烈さを選ぶ傾向がある。強い意志にささえられる深い思考力と、創造力を育てる大切な機能を持つ読書が、映像メディアの影響によって子どもから遠のいてしまうとすれば、これは重大な問題といわなければならない。

M・マクルーハンは、活字メディアの時代に育った人間と区別して、物心ついた時からテレビに親しんでいる世代を「聴覚型人間」とか「触覚型人間」とよび、耳できからだで受けとめたものはすぐ行動に移せるといっているが、電波の誕生は「熟読型」「思慮分別型」を消滅させ、特に映像メディアは、思考的人間と対極にあるタイプを育くんだといえそうだ。過去においては、思考を偏重しすぎたきらいがあったかもしれない。音楽や詩や絵画にも意味がなくてはならず、感覚や感触などを自由に表現するすべが乏しかったといえるかもしれない。しかし〝人間は、宇宙が人間を超えていることを知っているがゆえに尊い〟とパスカルがいったように、考えることが、人間の存在理由であることは疑いのないところである。今後もし、こうした考える人間が次第に減ってゆくというようなことになると、人間性の変化という重大な結果にもつながっていくのではないだろうか。

ここで問題を送り手側と受け手側と二つにわけて考えねばならないが、前述の研究報告「子どもとマス・コミニュケーション」では、結論として、今後の子どもたちに必要なものは、「……一方的に与えられる情報によってのみ思考するような画一的なものにとどまらず、新しく独創的なものに発展させていくために、現代社会でもっとも要求される能力、創造力の開発である。」とした。

人間が個人の尊厳をとりもどし、人間性を回復するためには何が必要なのであろうか。スペインの哲学者オルテガ・イ・ガセットの言葉を借りれば「創造的生のプランを想像する想像力」(注)である。人間がこの社会をコントロールし支配してゆくためには、機械が及ぶことのできない創造力と独創性の追求に、人間はあらゆる努力を払わねばならない。では、「大衆社会」「技術社会」「情報社会」とさまざまによばれる現代社会の複雑さのなかで、自己が生きる生のプランを得るために人間は何を学ばねばならないのであろうか。人間は本質的に動物的で愚かな面を多くもっている。感情的になって解決できない問題が日常そこここにころがっている。人間が人間ら

しくあるためには、お互いがお互いを認めあって、理性的に思考できるようにするために、人間は学ばねばならないのではないか。理論を学ぶことによって理性を得る。互いの立場を十分に理解したうえで、その理論を理性的に駆使することによってはじめて人間は理解しあい、さらに学ぶことも可能であるといえよう。

マスコミ・ゼミナールの諸姉とともにこの五年間、私は現在のマスコミとその将来を考えつづけてきた。四三年度の「深夜放送と高校生」（「文芸論叢」第5集掲載）では、高校生へのラジオの浸透度、ラジオの新しいあり方、その方向を模索し、三年後にふたたび「深夜放送」（「同」第8集）をとりあげて、つくられたマスコミの神話をこわそうと試みた。四四年度の「高校生の〝タレント観〟」（「同」第6集）では、マスコミの虚偽性とその浸透度を、四五年度の、前記「子どもとマス・コミニュケーション」では新しい世代へのマスコミの影響をみてきた。これらの報告はそれぞれの時代と密接に結びつき、その年の学生との協力によって生まれたものである。それらの報告から学んで、今私は送り手に、特に身近に娯楽を提供してくれるテレビについて次のように考えている。

テレビは視聴率という魔ものに追われて異常なまでに娯楽性を求め、思わず眼をみひらかせるような好番組が減少してしまった。

幼児期から小学校低学年にかけての子どもにとってテレビは、新しく開かれた社会への、知的分野への窓口として、子どもの知的興味を刺激する知的挑戦のメディアであった。子どもたちはテレビに現前する社会の、日日の呼びかけを知的挑戦として受けとり、個性の形成をつづけた。しかし心身の成長とともに、日日の挑戦は、繰返えし反復によって次第に日常的情性へと傾斜してゆく。社会に対する知的挑戦という緊張感が薄れ、なれあいの安易さへ陥ちてゆく。

大人にとっては、テレビは〝ゴロ寝のメディア〟である。前夜の疲れが残ってけだるいような日曜日、雨で予定が流れてしまった休日の午後など、あくびをかみころしながら、ゴロ寝しながら、見るともなく見過ごすメディアになっている。テレビがレジャーの最高位にあるということは、このような位置にあるということなのである。そもそもレジャーとは「技術の進歩によって節約された努力は、個人の生の新しい可能性の追求」に使われねばならないのではなかったのか。

飯坂良明氏は、レジャーについて次のように述べている。

「アリストテレスなどにみられるギリシャ的用法では、レジャーはむしろ一つの状態、しかも何かある行為がなされても、それは仕事の場合のように、ある目的のためになされるのではなくて、それ自身のためになされる行為、つまり自己目的的行為がおこなわれるような状態をさすものとされるのである。」

テレビをみることが、ゴロ寝の付属物ではなく、見るともなしに見るものでもなく、それ自身のためになされる行為にならなくてはならない。テレビがそれ自身のためになされる行為として、独立性を獲得することができたら、それはもはや人間疎外のメディアではなくなる。

子どもにとって知的挑戦のメディアであるとともに、大人にとっても、知的挑戦をするメディアへの転換、そのためには新しい知的緊張関係を回復する番組の開発に一そうの努力がはらわれねばなら

ない。テレビをみ終った時に、受け手が一人で、或は複数で、繰返し反復して考えるに足る番組の挑戦を受けるならば、受け手は垂直に受け入れたものを自已のうちで水平にひろげる作業を通して、機械との接触と人間との接触とを組み合わせてゆく。そうした思考をすることによって、受け手自身、マスコミによる疎外、洗脳、人間の画一化などをある程度くいとめることになるであろう。

要はマスコミがその課せられた社会的機能を十分に果たすことのできるよう、皆でマスコミの〃流れ〃を変えていかなければならないのだが、われわれ一人ひとりがその責任を負っていることを忘れてはならないのである。

（昭四七・一二・二〇）

（注）オルテガ著作集（白水社）「大衆の反逆」より

研究余滴　Ⅱ　＜俊成「五社百首『住吉切』」＞

世に「住吉切」と呼ばれる古筆切がある。俊成自筆の「五社百首」の断簡で、住吉社百首の分が残されていたところからの命名かと思われるが、実際には春日社百首の分も遺っていることは既にのべたことがある（和歌史研究会会報40号）。古筆切の集成が本文研究に資する点の大きいことから、折々目に触れたものを書きとめているが、次の一葉（十五行）もその一つである。現在までのところ、八葉（春日3・住吉5）を知ることができた。

槿　花

あさかほのつゆもやちよをへぬへきと
山ちのきくにうゑそへましを

駒　迎

あつまちやいく山こえしこまなれや
せきのいはかとなつまさるらん

月

あらさらんのちもこころやなほすまむ
みかさのやまの秋のよの月

擣　衣

のとなれる秋のあらしをさむしとや
ころもうつなりふかくさのさと

虫

わきてなほあはれなるかないその神
ふるきみやこのすずむしのこゑ

――「布留鏡」特別号、古筆了任著　大正一四年一〇月――

（松　野）